



〈オーロラと口笛〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

北極に位置するグリーンランド東部の

人口わずか八〇人の村が舞台である。デンマークから赴任してきた二八歳の青年教師の実体験の映画化。こういうドキュメンタリーともドラマ(フィクション)とも区別がつかない作品を『ドキュフィクション』と言うそうだが、壮大な自然とその中で現代人として生きる村人の姿には、有無を言わせぬ迫力がある。その地に心奪われた監督自身の熱い思いが直に伝わってくるのだ。

新人教師アンダース(本人)は、実家の農業を継ぐ決心がつかぬままに、国から派遣のデンマーク語教師としてこのチニツキラク村にやって来た。最果ての氷の島は、想像を超えた自然の美しさと過酷な実生活の共存する別世界だった。極寒の地の馴れない生活に加え、言葉も生活習慣も異なる一〇人の元氣すぎる子どもたち。親たちの態度にもよそよそしさが感じられて、な

かなか地域に溶け込めない。

ある日、授業で家族の絵を描かせたことをきっかけに、村では子どもたちが実の両親と暮らしていないことに気づく。「デンマークではありえないことだ」と呆れるアンダースに、面倒をみてくれる村人ジュリアスは、ここでは珍しいことではないと話す。生徒のひとり、アサーが無断で一週間も欠席したので家庭訪問すると、祖父と一緒に犬ぞりで狩りに行っていたと言う。「犬ぞりは楽しいだろうが、勉強が遅れると町の中学に行ったときに苦労するよ」と言うと、祖母は「アサーは祖父のような猟師になるのが夢なの。人生で必要なことはすべて祖父が教えます」ときっぱり。自身もアサーに村に伝わる猟師の英雄伝説を聞かせ、アザラシの身の捌き方を教えるのだ。

自分は何のためにここにいるのか。寒さに震えながら大柄な身をすくめ

て、途方にくれるアンダース。夜空には不思議な生き物のようなオーロラが。「オーロラは口笛を吹くといつて来るんだよ」とアサー。幼い頃に両親と行った狩猟旅の思い出を生き生きと語る老猟師…。一方的に教え、自分を受け入れてもらうことばかり考えていたアンダースの心に何かが生えた。

自ら村人に頼んでグリーンランド語を習ったり、犬ぞりを作ってもらい乗り方を教わったりするうちに、いつの間にか村人の輪の中に入っている。犬ぞりの旅では、吹雪の中で氷の小屋を作ったのいんだり、目前に白熊の親子と遭遇したり。凸凹の雪と氷の平原を犬ぞりを連ねて進むのは、爽快どころか命懸けの大冒険だ。

世界最大の島であるグリーンランドは、二三〇年余りの間デンマークの植民地だった。デンマークの影響と近代化の波は、光と影となつて今もこの村に及んでいる。時代の流れと伝統の狭間で、よそ者の自分は何ができるのか。アサーの夢は…。自問するアンダースにジュリアスが語りかける。「デンマーク人は複雑に考えるんだな。君は何がしたい?」と。ついにこの最果ての地に居場所を見つけたアンダースは、今も村の先生として暮らしているという。

『北の果ての小さな村で』

フランス映画 (94分)

監督: サミュエル・コラルデ

出演: アンダース・ヴィーデゴー、アサー・ボアセン、チニツキラク村の人々

7月下旬公開予定

